

2022年度（令和4年度）第1回千葉県体育学会大会 抄録

<一般研究>

睦沢町児童等の肥満解消と体力向上への取組アンケート調査結果

○馬場宏輝（帝京平成大学）

睦沢町では、子どもの肥満解消と体力向上へ様々な取組を行っているが、昨今の新型コロナウイルスの影響による運動不足が懸念されている。そこで、肥満解消と体力向上への取組をさらに進めるための基礎資料を得ることを目的に、アンケート調査を実施した。調査対象は、睦沢子ども園（5歳児）、睦沢小学校、睦沢中学校の児童・生徒約500名とその保護者である。

アンケート結果から分かったことは、「肥満傾向の子どもは学年が上がるにつれて減少する。肥満傾向の子どもは、小学生では女子より男子の方が多い。中学生では男女が逆転し、男子は痩身傾向にある」「体力・運動能力テストの結果は、肥満傾向のある子どもの方が低くなる傾向にある」「学年が上がるにつれて（特に中学生）、「すき・大切・得意」が低下し、体育の授業や休み時間、休日にもあまりからだを動かさなくなる。テレビやスマホ等の画面を見ている時間も長くなる。肥満傾向の子どもは、その特徴が強くなる」「食習慣については、町の子どもの平均値と肥満傾向・低体力の子どもの比較しても、大きな違いはなかった」などである。

ウェットスーツ着用による蹴伸び姿勢及びクロール泳パフォーマンスの評価

○奥野海門（株式会社第一テクノ）、中岡諒（千葉工業大学創造工学研究科）、金田晃一（千葉工業大学）、下永田修二（千葉大学）

本研究は全身を覆い浮力を確保できるウェットスーツを着用した際の蹴伸び及びクロール泳への影響を明らかにすることを目的とした。健常な4名の男性に対してウェットスーツ着用及び通常水着着用の2条件で蹴伸び及び15mクロール泳を行った。蹴伸びでは頭頂点の浮上距離と最大到達距離、膝が壁から2.5m, 3.0m, 3.5mを通過した際の上体部及び大腿部の水平面に対する角度、大転子が2.5mと3.5mを通過した際の水平速度の差を算出した。15mクロール泳では15mに到達する直前の3ストロークから、泳速度、ストローク長及びストローク頻度を算出した。その結果、ウェットスーツの着用により蹴伸びの最大到達距離が延長し、下肢が沈まず推進力の低下が抑制されたと考えられた。また、ウェットスーツの着用によって15mクロール泳のストローク頻度が減少し、さらに自身の身体に合ったサイズのウェットスーツを着用した対象者はストローク長が長くなった。以上より、自身の身体に合ったサイズのウェットスーツの着用は水面での泳姿勢を改善し、楽に泳ぐために有用であると示唆された。

<実践研究>

野球における守備位置決定理由に関する調査

○井上哲朗、百武憲一、大西基也、岩井美樹（国際武道大学）

野球の守備位置は、投手、捕手、一塁手、二塁手、三塁手、遊撃手、左翼手、中堅手、右翼手と、9つの守備位置がある。各守備位置によって、求められる能力がそれぞれ違う。大学生の野球部員は、幼少期から、野球を続けてきている者が多く、現在の守備位置に定着するまでに、何らかの理由が存在したと考えられる。しかし、これまで守備位置決定の過程や理由を調査した研究はほとんど見られない。

そこで、本研究では、大学生野球部員を対象として、現在の守備位置を決定した理由を調査し、守備位置決定要因の基礎的資料を得ること目的とした。その結果、現在の守備位置に決定した理由には、様々な理由がみられ、各守備位置の特徴が見られた。

オンライン・ウォーキング・イベント開催による、運動習慣への意識を高める実践的取り組み

○小泉佳右、林真奈香、竹田藍、河野宏紀、重本葉里、鈴木さくら、本多未来、三田莉加（千葉大学）

運動機会の確保および運動習慣を高めるために、スマートフォンアプリを使用したオンライン形式でのウォーキング・イベントを実施した。イベントは、2022年1月1～14日の14日間で開催し、アプリで計測された歩数を、駅の階段の平均的な蹴上げ高（16cm）に換算して、参加者の積算値で「国際宇宙ステーションまで登ろう（上空400km）」という目標を掲げて実施した。201名の参加で開催し、上空約2090kmまで到達することができた。運動習慣に関するアンケートを、イベント参加前、参加直後および2か月後の3時点で実施した。運動のために実施するウォーキング・ジョギングの頻度とアンケート実施時点との間に有意な関係性が認められ、イベント参加によるウォーキング・ジョギング実施機会の増加が考えられた。一方で、1回のウォーキング・ジョギング時間や、スポーツ活動の回数に変化をもたらすものではなかった。参加直後に運動習慣に対する意識が高まりがみられた参加者は、2か月後もその高まりを維持している可能性がみられた。

<発展的研究>

柔道稽古時における頭部衝撃暴露

○越田専太郎（了徳寺大学）、石井孝法（了徳寺大学）、久保田浩史（東京学芸大学）、中禮宏（東京医科歯科大学）

柔道における頭部外傷は、投げられた際に生じることが多い。そのため、先行研究では、実験室内で投げられた際に頭部に加わる物理量を測定したことが多い。ただし、これら結果が、実際の柔道場面を反映しているかは不明である。そこで本研究の目的は、実際の柔道自由練習時に投げられた際に加わる頭部衝撃（ $\geq 10g$ ）の頻度および大きさを定量化することであった。対象は、男子大学柔道選手3名（A, B, C）であった。頭部衝撃は口腔内に装着したマウスガード型慣性センサにより測定した。自由練習1本あたりの頭部衝撃の頻度は、対象Aで0.07回（2 /27）、対象Bで0.18回（7 /39）、対象Cで0.17回（5 /30）であった。一方で平均並進加速度は、対象Aで33.1g、対象Bで18.0g、対象Cでは23.1gであった。今後は、柔道時に加わる頭部衝撃の頻度と大きさ各々と、頭部外傷発生リスクの関連について明らかにする必要がある。